HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ホリデーイン日高」2014 実施報告
Author(s)	青木, 麻衣子; 妙木, 忍; 中村, 重穂
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 98-109
Issue Date	2014-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59653
Type	bulletin (article)
File Information	JISCHU18_11.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第18号　(2014)［実践報告］

「ホリデーイン日高」2014　実施報告

青木麻衣子・妙木　忍・中村重穂

要　旨

本稿は、北海道大学国際本部留学生センターが、外国人留学生を対象に毎年企画・実施する「ホリデーイン日高」という一泊二日の宿泊行事について、実施までの道のりと当日の活動とを実施報告としてまとめたものである。例年、日高町が主催する樹魂祭りへの参加を主目的に行事の企画を行うが、今年度は、宿泊施設の確保に困難が生じたため、アイヌ文化体験事業へと内容の大幅な変更を行った。それに伴い、日本人ファシリテーターの育成を目的に連動して実施している授業(「『国際交流』を実践する」)の内容およびスケジュールにも変更がもたらされた。本稿では、この変更に伴う利点・課題の双方についても整理し、提示する。

【キーワード】留学生と日本人学生との交流、国際交流、地域交流、留学生支援

1.　はじめに－本稿の目的

「ホリデーイン日高」は、毎年７月下旬に開催される日高町の「樹魂祭り」への参加を主目的とする国際交流行事である。１泊２日の日程で、共催者である国立日高青少年自然の家（以下、自然の家）に滞在し、祭りへの参加をとおして、日高の自然と日本の社会・文化に触れ、地域の人びととの交流を図る課外活動であり、全学の留学生を対象に実施している。留学生センターの設立後間もない1991年に始まったプログラムで、夏の恒例行事となっている。

当初は、北海道大学（以下、北大）に所属する留学生、研究員はもちろんのこと、他の公的大学行事とは異なり、その家族の参加も認めていた。しかし、留学生数の急増による学内外における支援体制の整備や高度人材の受け入れ・育成を主眼とする政府の国際教育政策の推進等から、行事自体の位置づけや目的、対象者の再考が必要だと考えた。そのため、2010年度以降は、日本人学生との交流を目的の一つに加え、従来２～３名の「学生ボランティア」としての位置づけにあった日本人学生を10名程度にまで

増やし、プログラムの性格・内容の変更を試みた。そして、翌2011年度以降は、主として学部１年生向けの授業「『国際交流』を実践する」（全学教育科目「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）」）の受講者が授業の最後にこの行事に参加するとの位置づけに変更し、日本人学生が積極的に行事の運営にかかわる体制の構築に努めてきた。

また、今年度（2014年度）は、樹魂祭りの時期が急きょ１週間ずれたため、宿泊先である自然の家が確保できず、調整の結果、アイヌ文化体験へと内容を大幅に変更し、行事を実施した。また、それに伴い、連動して実施する授業の内容および構成も変更した。

本稿は、アイヌ文化体験を柱に実施した、2014年度「ホリデーイン日高」の実施報告を行うことを目的とする。行事実施までの道のりを、授業での日本人ファシリテーターの育成と合わせて振り返ると同時に、各段階で必要とされた工夫や、行事を実施するなかで気づいた課題も記録しておく。先に言及したように、今年度は、祭りへの参加からアイヌ文化体験へと、その内容を大きく変更した。行事を終えて気づいたことだが、両者を比較することにより見えてくる、交流行事のむずかしさがあった。最後にその点にも、言及したい。

2. 実施までの道のり

「ホリデーイン日高」実施の計画は、その前年度の行事終了直後の、自然の家、北大それぞれでの事業総括の共有に始まる。すなわち、当該年度の行事を、参加者アンケートの結果に照らして振り返ることから、次年度の行事の内容およびそのための手続きの調整を開始する。

今年度（2014年度）実施事業についても、例年どおり祭りへの参加を予定していたが、2013年度末になってから、祭りの開催時期が１週間ずれる可能性があることがわかった。そもそも、祭りの開催日程の確定は、町の予算ともかかわるため例年６月ごろになり、近年は特に授業との連動もあることから、懸案事項ではあった。そのため、自然の家から提案のあったアイヌ文化体験を柱とする行事への変更について関係者で検討し、今年度は祭りへの参加は諦めることを決定した。

また今年度は、双方ともに担当者の変更もあったため、北大の関係者が自然の家を訪問し顔合わせの機会を持ち、その後、プログラムの内容やスケジュールについて、主にメールでのやり取りで調整・決定した。プログ

ラムの柱となるアイヌ文化体験にかかわる部分は自然の家が企画し、主に留学生と日本人学生の「交流」のための活動についての北大の要望をそのなかに入れ込むかたちで、全体の構成を調整した。

授業での日本人ファシリテーターの育成、およびその後の手続き等は、以下のとおりである。

2.1 日本人ファシリテーターの育成－授業との連動

「ホリデーイン日高」で留学生との交流の一部運営を担う日本人ファシリテーターの育成は、2011年度以降、「『国際交流』を実践する」(2014年度担当者：青木麻衣子、妙木忍）の授業をとおして行っている。昨年度（2013年度）からは、グローバル人材育成推進事業の採択に伴う新渡戸カレッジの創設により、一般教育演習（フレッシュマンセミナー）「多文化交流科目」として、主に新渡戸カレッジ生を対象に実施される科目（カレッジの修了要件科目の一つ）となったものの、授業の目的・内容に変更はない。

今年度は、授業開始直前の３月末に事業内容の変更を決めたため、シラバスに記載・公開している授業内容にも大幅な変更があった。そのため、授業担当者間で話し合い一部目的・内容に変更を施すとともに、受講者には、履修登録前に変更の要点および今後も行事の内容についてはいまだ不確定の部分もあることを伝え、事前に了承を得た。今年度の受講者は22名で、男性・女性の割合は、ほぼ１対１であった。

具体的な授業スケジュールは、以下表１のとおりである。行事運営のためのファシリテーターの育成にかかわる前半三分の一の内容や、授業の後半はグループでの交流活動運営のための企画・準備にあてるという構成自体は変わらないが、今年度は、行事の性格・内容に合わせ、アイヌ・先住民研究センターの教員に依頼し、アイヌ文化に関する講義をしていただいた。また、当日の博物館見学を有意義なものとするために、北大総合博物館の教員に依頼し、展示物を見る・伝える視点について、実際に博物館ボランティアをしている学生の協力を得て、そのヒントを学ばせていただいた。

授業後半は、「ホリデーイン日高」に参加する留学生募集のために行う事前説明会の開催と、行事初日に留学生と仲良くなるきっかけを作るための30分間の交流活動の企画・運営とを、学生に課題として提示し、その準備にあてた。例年、グループを六つに分けて行事の行動単位としているこ

表1　授業スケジュール

第1回(4/15)	ガイダンス、「ホリデーイン日高」について
第2回(4/22)	大学の国際化：データで見る北大の留学生
第3回(5/13)	「国際」「交流」って何だろう
第4回(5/20)	ことばによるコミュニケーション・ことばによらないコミュニケーション
第5回(5/27)	情報収集・発表のヒント
第6回(6/3)	アイヌ・先住民研究センター教員による講義
第7回(6/10)	グループ・ワーク①
第8回(6/17)	グループ・ワーク②
第9回(6/24)	受講者による発表①（事前説明会のリハーサル）
（6/25昼休み　ホリデーイン日高説明会）	
第10回(7/1)	グループ・ワーク③
第11回(7/8)	北大総合博物館見学・講義
第12回(7/15)	受講者による発表②（アイヌ文化についての事前説明）
（7/19-20　ホリデーイン日高）	
第13回(7/22)	総括
（第14回・15回(7/29・31)はホリデーイン日高に代替（のため休講））	

とから、1グループにつき日本人ファシリテーター（授業受講者）の人数が3～4名になることのみを伝え、その構成員の決定や課題の分担、具体的な交流の内容、当日までの計画等は、すべて学生自身が主導して行うよう求めた。授業内だけでは作業が終わらないため、教務情報システム（ELMS）上にこの授業の掲示板をグループごとに作成し、情報や作業の進捗が共有できるようにした。

2.2　参加者募集

例年、「ホリデーイン日高」の参加者募集は、その約1ヶ月前に始められる。国際支援課担当者が日・英両言語でポスターを作成し各部局に配信するとともに、留学生センター・ホームページおよび掲示板に掲示する。また、留学生対象のメーリング・リスト（OIAメール）での情報配信も行った。

一昨年度（2012年）からは、「『国際交流』を実践する」の授業のなかで受講者に、「ホリデーイン日高」の参加者募集のための事前説明会の企画・運営を課題の一つとしている。今年度は、参加者募集を開始する6月25日（水）の昼休みの時間帯に説明会を開き、参加希望者には、説明会に出席し申し込みを行うことを、ポスターやメール等で奨励した。この説明会も、「ホリデーイン日高」同様、日英両言語で実施する。

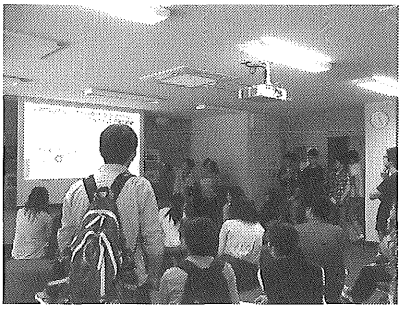

写真１　事前説明会の様子

参加者募集は、説明会終了後から約２週間、留学生のためのヘルプ・デスクである「留学生サポート・デスク」で行った。申込書は、サポート・デスクで配布するとともに、留学生センター・ホームページからもダウンロードできるようにしているので、参加希望者は事前にアレルギーや宗教上食べられないもの等を記載し、参加費とともに提出する。今年度は博物館への入場等、行事の性格を考慮し、定員50名を募集した。

その後、国際支援課担当者が自然の家と連絡を取り合い、参加者の部屋割やスケジュールを確認するとともに、引率者が集まり、危機管理体制や当日の役割分担、持参するものの最終確認・調達を行った。今年度は例年に比べ教育色を強めたため、２日目には活動を総括する時間を設けたが、それに必要とされる模造紙や付箋、文房具等も持ち物に加えた。

なお、今年度（2014年度）の引率者は、本稿を執筆している留学生センター教員３名と国際支援課および国際教務課から事務員各１名の計５名であった。

3.　「ホリデーイン日高」2014　活動内容

行事一日目は、午前７時10分にファシリテーター学生が集合し、グループごとに準備を開始し、参加者集合時刻（７時40分）に合わせて受付を行った。留学生のグループ分けは当日の朝、発表した。１グループの人数はファシリテーターを合わせて約７～８名とし、留学生は、引率教員が、性別や国籍などのバランスに配慮し振り分けた。それぞれのグループには、みかん、りんご、ぶどうなど果物の名称をつけ、一人ひとりに果物の絵の

ついたバッジを配布した。留学生は、募集人数50名に対し、当日キャンセル等も若干名あり、最終的に23名の参加となった。

午前８時に大学を出発し、午前10時ごろ二風谷に到着した。ここには、訪問先の一つである平取町立二風谷アイヌ文化博物館のほかに、平取町アイヌ文化情報センター、二風谷ダム、アイヌの伝統的な家であるチセを見学できるスペースがあり、10時30分まで散策した。

その後、10時45分からのオリエンテーションでは、日本人学生が授業で準備してきた催しを実施して、留学生との交流を深めた。活動の一つはクイズ形式で、博物館見学の前にアイヌ文化の概略をともに学ぶことを目的としていた。このオリエンテーションは、チセで行われた。

同じチセで昼食の弁当をとった。弁当はアイヌ料理で、献立表（「御献立」）の記載によると、鹿肉焼肉、山菜天婦羅、きとびろ玉子焼、平取トマト、焼鮭、ふきの煮物、オオウバユリの団子（トゥレㇷ゚シト）、いなきびの団子（シト）、きびとろキムチの各料理が詰められたものであった。

昼食後13時ごろより平取町立二風谷アイヌ文化博物館を二つのグループにわかれて見学した。博物館では、学芸員および通訳により日本語と英語の解説を受けた。この博物館には、生活用具類の展示、祈りや信仰に関する文化の展示、農耕や狩猟、葬送などに関する資料の展示があった。

博物館見学後に国立日高青少年自然の家に移動し、17時よりアイヌ古式舞踊体験をおこなった。大空を舞う鶴の踊りなどに全員が参加した。また、浜に打ち上げられたクジラを表現する踊りにおいては、学生がクジラの役を演じ、楽しい時間を過ごすことができた。

18時からのバーベキューでは、各グループでわかれて調理、食事、後片付けをおこなった。ともに食事の準備や片付けを共有することにより、交流が深まった。また、授業で触れた食事に関する配慮の必要性を体験して学ぶことができた。

２日目は、他の宿泊団体が一同に会する朝のつどいで、日本人学生１名と留学生１名が、日本語と英語でこの行事の趣旨を説明した。また、みんなでラジオ体操も行った。午前９時30分からの体験活動では、アイヌ彫刻を学びながら一人ひとりがコースターにアイヌ文様を彫刻した。彫刻の講師がときどきわれわれの机をまわり、丁寧に指導してくれた。また、アイヌ文様の切り絵をおこない、ラミネート加工をして各自が持ち帰った。イタドリの笛の体験では、講師が長いイタドリを切って渡してくれ、吹き方

を学び、音を出して楽しんだ。

昼食後は、13時より活動のまとめを行った。各グループが2日間の活動を振り返り、模造紙にまとめ、日本語と英語で発表した。

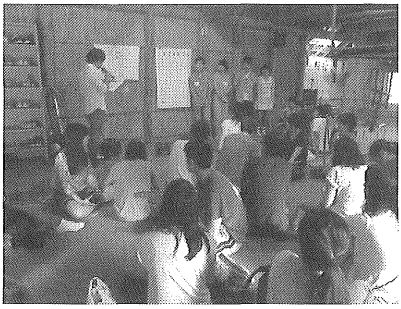

写真2　チセでの日本人ファシリテーター企画の活動の様子

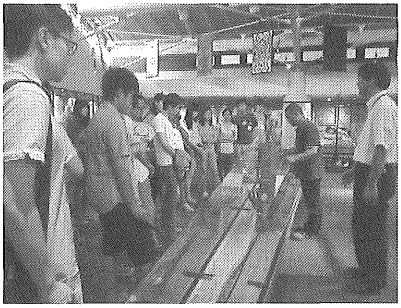

写真3　博物館見学

写真4　博物館での集合写真

写真5　バーベキューの様子

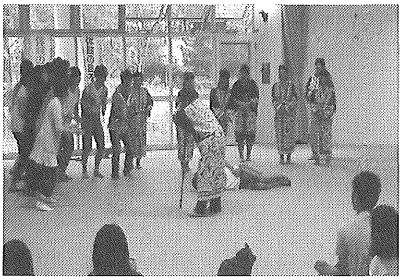

写真6　アイヌ舞踊体験

写真7　コースター作成体験

表2　「ホリデーイン日高」2014　スケジュール

【第一日目：7月19日（土）】	
8：00	国際本部集合、北海道大学　出発
10：00	二風谷到着・散策
10：45	オリエンテーション
12：00	昼食（アイヌ料理のお弁当）
13：00	博物館見学・集合写真撮影
15：45	国立日高青少年自然の家に到着
17：00	アイヌ古式舞踊体験
18：00	夕食（バーベキュー）
20：00	自由交流・入浴
22：00	就寝
【第二日目：7月20日（日）】	
6：30	起床
7：15	朝のつどい
7：30	朝食（国立日高青少年自然の家）
8：15	荷物整理・宿泊棟清掃・清掃点検
9：30	体験活動（木彫り、切り紙、イタドリの笛）
12：00	昼食（国立日高青少年自然の家）
13：00	活動のまとめ・ふりかえり
14：00	記念写真撮影
14：15	国立日高青少年自然の家出発
17：30	北海道大学到着

4．参加者による評価

この行事では、毎年、日本人ファシリテーター、留学生の双方に、行事参加前・参加後に簡単なアンケートを実施している。回答は義務ではないため、双方で回答数に若干の相違はあるが、事前アンケートでは楽しみにしている活動や参加理由、情報源についてを確認し、事後アンケートではこの行事を通して参加者同士の交流ができたかどうかについての自己評価

とその理由のほか、来年度に向けての改善点等を聞いている。

今年度の参加者は、理系・文系の区分では、理系２に対し文系３の割合で、留学生はその圧倒的多数が大学院生および交換留学生であった。日本人学生（ファシリテーター）は、授業の一環としての参加が求められるが、日本人・留学生ともに、国際交流や友達作りを目的にこの行事に参加したという者が多かった。

表３は、事前アンケートおよび事後アンケートにおける、楽しみにしている活動および楽しかった活動についての回答数をまとめたものである。すべての項目で事後の回答数が増えていることから、事前に想定していたよりもこの行事自体が楽しかったこと、かれらにとって充実したものであったことが推察できる。特に「交流活動」については、19・20日の双方で「楽しかった」と答えた人数が大幅に増えている。また、「活動のまとめ」も同様である。19日の活動は日本人ファシリテーターが授業をとおして学び準備した内容であり、かつ２日間の行事の交流のきっかけを提供する重要な位置づけにあったため、課題は散見されたものの、その成功を表していると考えられる。

表3　「ホリデーイン日高」2014アンケート

「楽しみにしている／楽しかった活動」についての設問（複数回答可）

事前アンケート（有効回答数44）		→	事後アンケート（有効回答数45）	
交流活動(19日午前)	18	→	交流活動(19日午前)	28
博物館見学(19日午後)	11	→	博物館見学(19日午後)	14
アイヌ舞踊(19日午後)	16	→	アイヌ舞踊(19日午後)	24
バーベキュー(19日夜)	29	→	バーベキュー(19日夜)	35
交流活動(20日午前)	17	→	交流活動(20日午前)	35
活動まとめ(20日午後)	4	→	活動まとめ(20日午後)	12

また、事後アンケートの「交流」に対する自己評価では、今年度は、すべての回答者が「よく交流できた」と振り返る、大変うれしい結果となった。その理由として、参加者同士の「フレンドリー」な雰囲気があげられていた。また、具体的に、「みんなやさしく話しかけてくれた」「バス内でたくさん話せた」「日本人がやさしくて積極的だった」等が指摘されており、ここでも、日本人ファシリテーターの努力がうかがえた。

5. おわりに－交流活動を考える上でのむずかしさ

今年度は、以上にまとめたように、これまでの祭りへの参加ではなく、アイヌ文化体験行事として、「ホリデーイン日高」を実施した。祭り体験としての行事はすでに留学生のあいだでは認知度が高く、特に交換留学生にとっては先輩から聞き参加したい活動の一つに位置づけられている。アイヌ文化を柱とする旅行・行事等は、他団体や他の授業内でも博物館見学等により実施されており、北海道の大学に在籍する学生にとっては、すでに馴染み深いものの一つとなりつつある。今回、行事内容の変更に伴い参加を希望する留学生の数が少なかったのには、そのような背景もあるのかもしれない。

しかし、授業との連動を考えたとき、事前に大学の都合を加味し日程を確定できることは、大きな利点の一つである。特に実際に一部の活動の企画・内容を担うファシリテーターである日本人学生は、この時期、１学期テスト期間にさしかかるころでもあるため、事前に準備の予定がたてられることの利点は大きいだろう。また、アイヌ文化を基軸としたグループ活動を随所に意図的に取り入れたことにより、学生同士の交流も進み、結果として参加者の高い満足度につながった。さらに、教職員にとっても、祭りのように不確定要素の多い、他団体・個人にもオープンなイベントに比べ、全体の統率はしやすかった。

留学生が学生総数の１割近くを占める現在、大学に求められる留学生支援のあり方にも変化が求められている。留学生は、もはや特別な存在ではない。また、大学内外の組織・団体による英語を媒介語とする企画等も増え、LCCの登場により、比較的安価な料金で国内旅行を楽しめるようにもなった。学生のニーズをくみとることは、大学主催の行事であっても必要なことかもしれないが、今後は一層、その対象者を絞ることになったとしても、より明確な目的をもったプログラムの実施が求められていると考える。

謝辞

「ホリデーイン日高」は、北海道大学国際本部と国立日高青少年自然の家が協同で実施しています。企画・運営にあたっては、自然の家の担当者の方々に大変お世話になりました。また、「『国際交流』を実践する」の授業の中で、2014年６月３日にアイヌ・先住民研究センターの山崎幸治先生

がアイヌ文化についての講義をおこなってくださいました。また、2014年7月8日には、北海道大学水産学部2年で北大ミュージアムクラブMouseionに所属する岩崎峻さんと雲中慧さんが博物館展示の解説をしてくださいました。その際には、北海道大学総合博物館の湯浅万紀子先生に大変お世話になりました。以上の皆様に、深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

あおき　まいこ（留学生センター准教授）
みょうき　しのぶ（留学生センター特任助教）
なかむら　しげほ（留学生センター准教授）

【Report】 2014 Holiday in Hidaka

AOKI Maiko, MYOKI Shinobu and NAKAMURA Shigeho

This paper reports on reporting an international exchange event, 2014 Holiday in Hidaka. This weekend excursion is organized every year by the Office of International Affairs, Hokkaido University and the National Hidaka Youth Outdoor Learning Center. The main purpose of the event has changed from promoting cross-cultural understanding for international students to providing the opportunity to participants for multi-cultural interactions.

Although we usually participate in the local summer festival in Hidaka as a main part of this event, we decided to have a study tour on Ainu culture this year due to the change of the schedule. 22 Japanese students who took the freshmen course, 'Implementing International Exchange' (one of the compulsory subjects for Nitobe collage students) planned and carried out some activities related to the study of Ainu and intercultural communications.

The questionnaire surveys made at the beginning and end of the trip show that the participants enjoyed this study tour and that there were good interactions among the participants, although not many international students joined this year. As many other groups organize international events in English and students are able to enjoy their trips at a reasonable cost with LCC, we as a university might have to reconsider the aim and contents of this kind of event.